

外務大臣賞

「小さな活動から得た僕の夢」

慶應義塾高等学校 3年

川口 博也

2017年8月、教会に設置されている難民支援センターで僕はミャンマー人一家への支援物資を詰めていた。彼らに送るお米やカレーや油を詰める途中、4歳の子供への絵本を箱に入れるとき、ふと手が止まった。2年前に会ったカンボジア系アメリカ人のキャメリンを思い出したからだ。今の僕があるのは彼のおかげである。

2015年8月、僕はボーイスカウトの世界大会であるジャンボリーに参加していた。そこで出会ったのがキャメリンだ。彼は普段はアメリカで英語と歴史の教員をしているが、夏や冬の休み期間にはカンボジアを拠点に教育活動をしていた。そしてボーイスカウトの指導者としても活動している人だった。たまたま移動の際にバスで隣になった彼は僕に話しかけてきた。彼はカンボジア系のアメリカ人だった。父親がカンボジア内戦から逃げてきて自分は二世だそうだ。自分の父のように内戦で苦しんだ人を救いたいと考えせめて少しの時間でもと思い、毎年カンボジアへ通い絵本を読んであげたり、読み書きを教えてあげたりしているそうだ。自分の時間を献上し、人のために働き、カンボジアの子供達の写真を僕に見せながら話をする彼はとても恰好良かった。

これをきっかけに世界の社会問題に興味を持つようになった。国連などの国際機関や支援活動をしている団体を本やネットで調べるようになり、現地取材を行ったジャーナリストの講演会などにも足を運んだ。調べるうちに、色々ある組織の中で、紛争地域や貧困地域の支援の中核を担っているのは国連だと思い、国連の概要をもっと知りたくなった。そんな僕にとって模擬国連は絶好の機会だった。国連の国際会議がどのように開催されるか、またどのような課題が議論されるのかを学び、国連の在り方を学ぶことができた。同世代の高校生達と、難民問題、核問題や児童労働などの、僕達が大人になるころにもくすぶっているであろう問題を議論し、自分の考えを述べたことで、これらの社会問題に対し、自分自身が行動を起こしたいという気持ちが強くなった。しかし部活や勉強の関係で、肝心のボランティア活動ができないでいた。だが、3年生になり部活を引退したら、何か奉仕活動をしようと心に決めていた。

2017年8月、無事部活を引退し、日本に避難してきている難民、また日本に出稼ぎに来ている在留外国人達の支援を僅かながらすることができた。それが教会を拠点とした難民支援センターの手伝いだ。日本にも難民はいたのだ。僕もその存在は知っていたが、驚いたことは日本での彼らの待遇であった。日本に難民として受け入れられること自体がまず難しい。2016年には10,901人が難民申請を日本政府にしたが、28人しか認められなかった。だがこの受け入れられた難民達もいまだ苦しんでいた。食料の確保すらできない状況の人々もいた。そんな人達へ向けて、僕は食料や衣服を届けた。子供がいる家庭には絵本も届けた。

今回の活動を通して、少しの時間でも何かしらの支援はできると実感した。また同時に僕は今までアフリカ大陸や中東での支援活動などに目を向けすぎてしまっていたのかもしれないと思った。少しの時間を使ってできることはやはり日本国内での活動だ。日本国内でも苦しんでいる人達があった。僕は那些人達を無視して海外で何か支援をしなければと思い込んでいた。僕がこれから大学生になりできること、それは国内で苦しむ難民達への支援を継続することだ。そして今年は高校生だからと断られてしまった国連でのインターンシップを試してみたい。国連で実際に働くことで、模擬国連で得た知識や難民支援で得た経験に加え、さらなる知識や経験を得ることができると思う。そしていつか、キャメリンに再会し、感謝を述べ、一緒に子供達に絵本を読んであげたい。